

# 新潟西部地域 「新之助」生育情報 No.5

令和7年7月10日  
巻農業普及指導センター

## 高温続き、葉色低下！ 飽水管理を徹底！ 幼穂長を確認し、適期に適量の穂肥施用

【7月10日の生育データ(指標値比較)】

草丈「長」、茎数「少」、葉数「やや遅い」、葉色「並」

区分	調査地点	移植日	草丈(cm)		茎数(本/m <sup>2</sup> )		葉数(L)		葉色(SPAD)	
			本年値	指標比%	本年値	指標比%	本年値	指標差L	本年値	指標差
分施	岩室(普及)	5月16日	61	117	620	107	11.1	-0.4	32.0	-2.5
全量基肥	巻	5月16日	62	119	547	94	11.4	-0.1	36.8	2.3
	岩室	5月8日	56	108	421	73	11.0	-0.5	32.6	-1.9
	潟東	5月13日	54	104	618	107	11.4	-0.1	36.8	2.3
	中之口	5月12日	59	113	526	91	11.0	-0.5	34.6	0.1
	黒埼	5月11日	57	110	435	75	11.0	-0.5	33.1	-1.4
	西川	5月18日	59	113	448	77	10.5	-1.0	34.5	0.0
	にいがた西	5月11日	67	129	505	87	11.3	-0.2	32.5	-2.0
全体平均		5月13日	59	114	515	89	11.1	-0.4	34.1	-0.4
指標値		5月15日	52		580		11.5		34.5	
近年値		5月13日	57		531		11.1		36.2	

※調査地点:JA新潟かがやき「越後中央」新之助研究会、JA新潟かがやき「みらい」新之助栽培研究会、普及センター気象感応ほ調査データ  
※近年値はH29～R6までの平均値

### 【今後の管理ポイント】

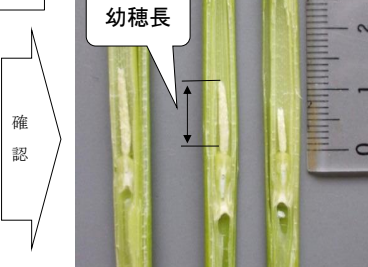
- 分施栽培の1回目の穂肥施用時期は7月21～24日頃と予想されるが、ほ場毎に幼穂長を確認し、適期に適量を施用する。
- 水管理は、出穂期1か月前となったので、浅水の間断かん水から徐々に飽水管理に移行する。
- 水面施用粒剤での穂もち防除は出穂20日前頃に実施する。  
葉もちが発生したほ場では直ちに粉剤か液剤で防除する。県内でいもち病の発生が確認されているため、作付ほ場の発生状況を確認する。
- 紋枯病が前年多発したほ場では適期に防除を行う。

### 【収穫前までの栽培管理】

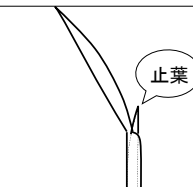
#### 1 穂肥時期のめやす

- 1回目穂肥時期は出穂期21～18日前で、幼穂長が5～10mmになった時期。
- 2回目穂肥時期は出穂期12～10日前で、止葉の葉耳（葉の付け根にある突起）とその下の葉の葉耳が並んだ頃（葉耳間長0cm）。

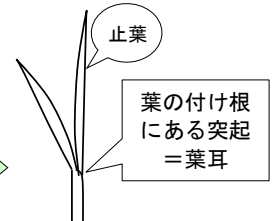
1回目穂肥時期のめやす



2回目穂肥時期のめやす



止葉の先端が  
出始めた頃  
出穂 およそ18日前



止葉の葉耳とその下の葉の葉耳が並んだ頃：葉耳間長0cm  
出穂 およそ10日前

## 2 穂肥量のめやす

### (1) 分施栽培 1 回目穂肥

下図を参考に、幼穂形成期の草丈と葉色（SPAD値）から施用量を判断する。

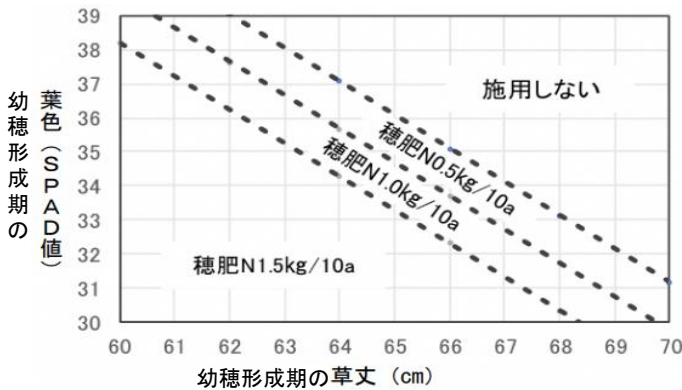


図1 適正な㎡収数に誘導する1回目穂肥施用量の判断めやす

（作研センター：H29～R元）

注：めやすは幼穂形成期の茎数が300～750本/㎡の範囲で適用する。

### (2) 分施栽培 2 回目穂肥

下表を参考に、葉色（SPAD値）から施用量を判断する。

表1 適正な出穂期葉色に誘導する2回目穂肥施用量のめやす（作研センター：H29～R元）

穂肥2回目施用時の葉色（SPAD値）	32.0未満	32.0～34.5未満	34.5～37.0未満	37.0以上
施肥窒素量(kg/10a)	1.5	1.0	0.5	施用しない

### (3) 出穂期10日前以降の追加穂肥の考え方（分施・全量基肥栽培共通）

- 玄米タンパク質含有率を高め、食味の低下につながるので、**出穂期10日前以降の穂肥は、原則、施用しない。**
- ただし、**出穂期3日前**（かつ、分施体系では2回目の穂肥から1週間以降）の、**第2葉（止葉の次の葉）のSPAD値が34未満**で、**登熟期間の高温が予想される場合は**、追肥穂肥も検討する。  
施用量は最大で**窒素成分1kg/10a**とする。

## 3 水管理

- 稲体は、幼穂形成期から出穂・開花期にかけて最も水を必要とするため、この期間に水が不足することのないよう、**飽水管理を徹底**する。
- **異常高温やフェーンが予想される場合は**、急激な蒸散による出穂前の稲体活力の低下を防ぐため、**速やかに湛水**する。ただし、長期間の湛水は避け、可能な限り**ほ場の水温上昇を抑えるためのこまめな水管理（水更新）**を行う。
- 早期落水は、品質・食味の低下につながる。このため、**通水最終日には十分にかん水し、出穂後25日頃までは飽水状態の維持**に努める。  
また、登熟後半の土壤水分確保のため、**気象状況をふまえ、できる限り暗渠栓を開ける時期を遅らせる。**



写真1 飽水管理で水田の「足跡に水が残っている程度」

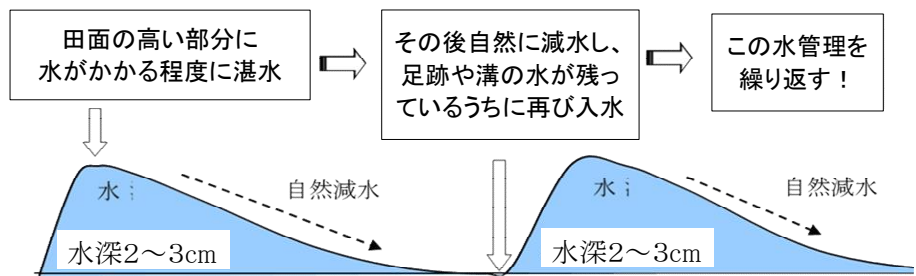


図2 飽水管理のイメージ

「水稻栽培技術対策資料No.5」など参考情報提供中！  
『巻農業振興部』で検索、ホームページをチェック！！